

## もろびとよりの日本への旅

人類学者

川田順造

●第一部 ● 江戸東京の下町が「記憶」するもの

## 江戸Ⅱ 東京を支えた鄙、そして風狂の輩

## 「奥の細道旅立ち」追体験

私もメンバーの一人であるNPO法人本所深川は、深川人松尾芭蕉が「奥の細道」の旅に出た旧暦三月二十七日にあたる日に、「おくのほそ道旅立ち追体験ツアー」を催してきた。今年はその三回目で、旅立ちから三百二十年目だ。

いままで日程が合わず涙を吞んだが、今年こそはと、その五月十六日土曜日を早くから動かさない予定として入れてしまい、文字通り万障繰り合わせて参加した。

そして、やっぱり参加して良かったと思った。私にとって学ぶことの多い、感銘深い「追体験」だった。で、前回予告した広重と一緒に飛鳥山の花見に行くのはもう少し先送りして、このツアーで考えさせられたことを、感銘の薄れないうちに書いておきたいと思う。

感銘の第一は、芭蕉という風狂の輩やからのイメージの多様さと、他にも数々の風狂の輩を受け入れた本所深川という土地の性格をめぐってであり、第二は江戸Ⅱ東京を支えた鄙ひなの一角としての千住という土地の、奥深い豊かさについてだ。それぞれの内容を述べる前に、まず当日の「追体験ツアー」のあらましを追体験する

ことから始めよう。

十六日は朝から蒸し暑く、曇って、いまにも降り出しそうな空模様。リピーターもいる熱心な参加者六十人は、一人の遅刻もなく、九時半に地下鉄都営大江戸線の門前仲町改札口に集合した。私を含めほとんどが中高年で、大半は女性だ。

赤組と青組に分かれ、NPOの案内役がもつ、棒先につけたそれぞれの色のひらひらを目印に、出発。各組に一人ずつ、江東区教育委員会のベテランが案内説明役としてついている。

NPO本所深川の世話役の人の話では、今年も申し込み多数で六十人を上回ったが、これ以上ふえると屋形船をもう一艘チャーターしなければならぬので、締め切ったとのこと。あとで、本所深川の事務局で申込書を整理した結果を教えてくださいましたが、六十名のうち、女性四十一名、男性は十九名、年齢は、申込書の記入漏れなどもあって正確には分からないが、最高齢者七十八歳の男性一人を含む七十代六十代が大半で、最年少は三十三歳の女性だった。若い層にも関心をもってもらうには、どうすればよいか、今後の課題だ。

## 四十五歳の老成した宗匠

お閨魔さまの前を通って、最初の訪問地、仙台堀川に架かる海辺橋南詰の採茶庵さいとあんに行く。「奥の細道」へ旅立つため、芭蕉は広大な芭蕉庵を人に譲り、芭蕉庵の土地を提供した、富裕な魚問屋で俳諧の弟子だった杉山さんぼう（鯉屋）杉風（正保四年～享保十七年＝一六四七～一七三三）の庵室、採茶庵に移ったとされている。

昭和三十三年十月一日、江東区の有志が、ここに庵室の縁に腰掛けた旅立ち姿の芭蕉像（次ページ「写真1」）と記念の石碑を建てた。採茶庵は、「元木場平野町北角」という現存する文書からすると、実際には海辺橋の北東側にあったと思われる。そして芭蕉は旧暦の三月二十七日、まず採茶庵から千住まで、船で隅田川を遡ったとされている。三月二十日出立という記録もあるが、これは初めの予定を記したものと解釈されているという。

このように、旅立ちからして芭蕉は不確かなことに囲まれているのだが、興味深いのは、この宗匠頭巾をかぶり杖をついた、老成した芭蕉像だ。